

韃靼勝敗記

四

13  
1423  
4



18  
卷



韃靼勝敗記卷之四

○リ李氏係と授けく山西勢と悩む  
 名を至仍をたり仍をのあつると智係と係するハ我玉の  
 子なり李伯玉リを西に英吉刺の軍艦と防がんとして  
 黄河に面りてまは淮南の城王可鞏コを李氏リが  
 陣入り猪軍と係し至るまは李伯玉リもそのまに  
 任せ城中に居る將く入るの勞を休めり柳天鑑リ  
 李李伯玉リが指号と交て二万の軍勢を捕る  
 英華と呵濟して南京入りて子くを隣の諸風風澤  
 多るれは是と及んとて老丹男女の兵別をくそのお側小

群集して見物を既して南系より引り出さしめてけ旨と  
訴へられは洪武能りやう天徳帝のおま出でけ後若河口の  
戦ひは英おと始り一万の勢と生捕英船降と乞ふは依と  
今日南府へ引来まは思辨と廣庭小引居君是と思辨  
倫言ありと思と蒙らせらるゝ心さく属しなうんと  
奏し別一万條の英率とる廣庭小引出さるゝ天徳帝の  
上候ふまで引りして英國の旧交の好と心さく一旦少系小一  
し合戦小及ぶるの好んぞ我は款するまあは然らば我は  
ぞ英皇と思まん汝等赤軍刺さくして捨てぬて赤んと願  
降系と乞ふ系神妙あり今今野んと排まは我小属し名

とそせは海一統して後の原く思貴でんと能く無慮の  
一言も度賈徳と始り士卒皆く感徳と乞ふは明  
君と知は様りは改書し悔しと後の我は二心さく  
仕へなるのそをばは國女帝へもけ計と心さく君は属せん  
と中幼めんと謝しとんは洪武能りやう帝の傍ありと  
汝は小水系へ加勢して者と乞ふの旨と本國へ中送りに  
依と不目と大軍押寄るのにと李伯玉りさくへ中送らる計  
是りつと命をらるゝとゆらまはるゝ事と後敗るはと受せと  
まは汝等へ南府と留め置へしけ指らぬとて南系府  
の心印とお借る諸彦へも百人づから取けらるゝ又李伯

玉りくを淮安城に留りてより日く王可彰と共  
軍を編下海より先を慶賈徳と云一英吉  
利後活の大軍押来るる官易の事にあきり又水軍も  
英吉利と謀り合せて先を慶賈徳と云一英吉  
利後活の大軍押来るる官易の事にあきり又水軍も  
押来るる海軍の先を慶賈徳と云一英吉利  
艘を淮安城の外海に入し不整と又味の内外要害の  
全うする所を修補し或は法方小を人の者を必して軍  
使港より来る案を遠く山西沿海の大官劉璋り  
同澤海の大官曹寛のあわい水軍より淮安後活の  
艦使あるに依り俄に軍勢と調練し支那合して十万人

て攻めんと李伯玉りてが若者より若くは英吉利大  
軍より上陸より十万人の大軍押来るる官易の  
合戦の難きなりと巨し海を渡りて陸地の敵と欺  
ましく日と後より海上の敵は我自り討てて王可彰  
しやうに令してを海の上を築めさせらるる又時日と後  
三万人と得たり是とおもにかけ一隊各み子人崔瑛  
陳連れん等の勇将六人小卒六十人づつと授けてこれ  
考しめ紙旗紙幟と送りぬ十人小旗幟二かづつと授  
崔瑛えい陳連れん等の六人を呼を討て白桃園山を東西

小長く挺りあくに澄きの大木と開けの歌勢け山と載  
どしてのりまよりもけ地へ来るも終り依之山の終頂  
に登り六の所小陣一七氏あまた知して居り旗幟と統  
一練波の勢とよて今も打つるべき勢いと居り疾の勢  
の初明と無一金報と打つて歌陣をくを決絶を放し  
疾汁をまの容みと見せぬべまの合戦とるまへうら  
海女の歌と打拂りて歌自りゆりむくぞと細り小計策  
と授けしるべ雀撲えい陳連れん木の六の捲系山へと馳  
り日あがびして桃源山あり指界のごく六ヶ所小をま  
陸とる存候と出でて歌りむらに歌を子象山と申

少四ノ三

来り遠小山と見上まが山の終頂うら後羽製の大旗大幟  
数百本東西に六十里がる小えはて勢の別弱多廿の初  
べうら劉璋曹寛へ仲とて大に發きて白赤  
天徳の軍師信長統率し倭計事連の名おらるる  
善く雪及べども初る大軍おくも我々が前途をたると  
いかりても不審しきるがく廉忽の戦いと仕掛不えを  
らが淮安の後信の思ひもよらば督く兵を止め容みと見  
とて一友日を足合せ居まとも打拂るまをなくと居り  
の如る中うもろまが劉璋曹寛のあ將のまを詩  
ち争く攻付どび大なる患と引かさん後りとて歌の虚実を記

後明勢奇  
計と以て  
清の大軍  
と悩むと  
圖



目







が仕立をりし小松本國又別り小松よりの船使定海も春  
りく加勢とをりしありしより直ち虎門厦門定  
海三ヶ所の兵を集め軍艦六十餘艘小松黄河北小押  
寄南京小攻入りと既小出帆せしと具は海へあまひ  
女帝作して彼國の一千八百六十一年九月中旬に水師提督  
薛霸厄せいはく小軍艦大小二百五十艘小軍勢十萬餘騎と  
托し小松加勢南系征討と命せしる薛霸厄せいはくは僅で  
幸し是と忠告して出帆し既小廣東のけ方遠の仲小松の  
小松とひく虎門厦門へ幸の体とるせしる慶賈法  
とくも子先をく二万六千の軍勢をて黄河北に押寄一戦

のひは南多へ生捕またり生死を未だ分らんと差へく  
薛霸厄せいはくを齒ぐるとは慶賈法せいはくもまろく味方乃  
漢るる先小事を計り別る不是とあつてそ奇快を  
然りとて今又悔んで後々れば我忠勢黄河北に押寄を  
二五三に款と破り南系と攻め先敵の船隊と雲かん  
二百五十艘の軍艦と十隊ふち一隊二十艘づつ  
正々黄河北へ漕春り先陣もくも黄河口の者をく乗  
寄越後白殿天炮等を打掛けけ時黄河北の協王王可彰  
しりし小松伯玉りし小松の系天徳帝とく小降係し  
りしより未だ寸功も建らるるは

ら我航海の術をん歌を彼んと乞ふれば孝伯王  
賢く思惟して我軍皆皆勇壯なるまども航海の術を  
乞ふるに王可彰しやうがまじしを任せ先陣と稱し味方の内  
より航海不測なる者を八千人撰み出さし王可彰しやうは後  
をれば王可彰しやうい子塔と合して二万餘騎已ら終へし軍  
艦とけ及急をえらる所の英船とて打撃南東流西深流打  
混じて海へ大筒を放し掛て漕舟と書伯玉りくハ渡りて  
黄河ををるの漢巴西を所不海と布き差場を大筒と掛  
後明の旗と風小靡うせて威を痛くしり既小王可彰しやうハ  
船を乞ふて決死と打掛まども英吉利新製の軍艦ハ水

城と唱つる程の煙突ありていろろ大煩と魚ども打碎く  
と能りて適大煩の玉の中ら時ハ水は流くもくまをり王  
可彰しやうが船ハ水板と唱つる程の毒り程うして大筒も亦  
英人より遠く者りも歌のりよ二艘と打碎りまをりまをり  
又へまをり王可彰しやう思ひおしそ歌を軍艦煙突ありよに  
航海大術小喫まをり船のどく砲戦五射と移さハ味方の  
船急く打碎りまをり又カ我に及び被る十萬の船二萬り  
歌するまをり船は歌船ハ大筒を放し切らるまをり  
て歌船の艦ハ急後り行場より切殺とて知し軍艦  
数艘と一連し大筒の艦と目分けを付ハ歌船行面を

大旗二十八門と一夜不打放と王可彰しやうが船二艘まで  
あまに打たせりしと雖も是れ船に成りしと燒  
まど王可彰しやう烈しくわ知して敵船今大旗を放し勿  
らり也督りるや押寄て死の星と矢よりも子く漕を付に  
英船お島とて多ふ船を曲拂とせし行面よとせし大  
旗二十八門と後向又一回又打放とせしとて席上の敵  
と扱ふがごとくも王可彰しやう敵船お島を多し仕るに  
刺さへけ敵は不味方船人たよ若年と矢の危方を今  
何の面目もて書伯玉とて小面を合さんよや敵は討た  
決よく討死さんとせしとて大旗を放し掛く王

六百八

茶の漬く丈いと挑て敵うもその軍艦數十艘まで王可  
彰しやうが討たせし軍艦とて是れ八方より天龍と打掛  
て既小危うと忍へる所へ書伯玉とて子く是れを傳つて  
子船とて王可彰しやうお島をるる軍の精敗の討た  
置ひあちり血争の残ひとてして士卒と矢のそをんん  
あつる命と海しあつる子く討たせしとてさあへしとて  
まの王可彰しやう是とて歩て城小艦と纏り陸地とせしと  
是れゆり味方と者まの船の二万の軍卒僅二千とては打  
らるるは面目らくぞ忍へる英勢是れを海とて二百  
十艘の軍艦黄河にのそを十八里がる小危はて陸地を

く大煩天炮を烈しく打樹大山も崩れ勢ひつて坤  
 走り書伯玉みまの陣ふ知を傳へ砲形  
 べー意場の天筒の意を打樹よ款上陸する及  
 砲形の尾をひく引包と竹を付れまると身  
 中央の陣を去るた右の心と配り王可乾  
 あつしめ砲戦の林樹をそとと港ありし書伯玉  
 まくそた右を折ふ知するの軍記の届  
 して既ふ二ヶ所を款のる打くめらる陣を  
 る是とく海より英吉利勢は身を清く生  
 後陣打屍ト皆一日は海原に押寄て先陣より

上陸し英の薛覇厄にも既ふ上陸し烈しく下  
 付快炮と打振て攻揚る味方ハ僅ふ万は  
 万ふゆる大軍ちま味方是を香と恐怖して  
 傍に既ふ意散軍に及んとてま成りけ体と  
 ねし秘文と痛を思深るる南京の方より一  
 の馬雲飛来りそ中より折くの兵形形り  
 一文竹ありて支脈を後のでく照赫を以  
 後送る早より炎と噴きた右のよに大を  
 あつしめ牙の長僅は尺計ありて青漆の  
 支角ありて支脈より炎燈ありて或は英

墨見蘭  
火單と  
欺討の  
圖



卷之四十一

なるありききる英兵の凱より扱と振てかり脊の儘  
こ者ハ是元と潜り初る吳形の内の或ふ方より敵を知り  
ぞ打と盡まの英兵初渡河と斜と挿へて突んと今れハ  
忽然として消へまゝあ後た右を破りて怒をば英兵も  
勇氣と挫く是果と我の河をば渡ふま伯玉りて敗  
軍の味方と集め候へと之を一圍と化つて突くと英兵  
氣う溜へて海面より迎をり艦を突んとするあま  
伯玉りて又秘文と唱まの忽ち海より運派と捲てら  
奈くと忍へるハ英兵薛霸厄と始め諸軍遠いけり  
こいふと牙の毛泳きて此後より後ろより南京勢艦波と

依り吳形と共と匿掛る薛霸厄と今ハ後方より降人ふ  
畢り李伯玉りてこまんと苦を止め提督と始めお全  
の分抄るハ武義と上再び秘文と唱まの吳形と候  
かともさく消去運派忽ち中より放るハ英勢とさび  
作天と扱の敵も奇跡ありて初る怪矣と駭り我くが  
大軍と挫きしと信く名怖く水師提督薛霸厄と  
色河とハ李伯玉りて小海より移り定連て慶賈徳と  
休へと依く女帝と我ふ命とて少事と加勢せしハ色河の  
好とありて止りと得るはちり後ら後明帝と敵對する  
の謂はは新々の天徳帝と哀憐と齒て花と許され

ちの如くは海に女帝と勅め小系と離れ永く天統帝と  
 共に属しきりんとするればま伯玉とて是と成てた成  
 都のちまども我一己の予智と以て免れ難く南系小系  
 して裁許又任まて先支と成りしめりておれりて悪く  
 火急名具と差出し演多不降して是善と成りて若汝お悔  
 ふ成て我妙術と成りて車に塵ふせん結く情といさう  
 狼藉ありてと且威し且宥めと成りてこれ英お薛  
 覇厄と成り信と成り怖し新り宵くすなぐ演多不降しと  
 許容と成りま伯玉と成りて軍務と成りて二百六十艘の軍  
 艦も一所又集め勢と成りて分けと成りて身を海安の城

中にまけけ南系へふるるといふ海へしむ

○忠孝友金復讐の事

夏小夷國希代の復讐ありて艦船と成りて各嘯嘯と成り  
 に合体せし法王唯唯喇嘛らまの世下に火草と成り墨史兼  
 らんとする二人の勇士あり彼國の風俗と成りて長槍と丹  
 練すりと成りて勇名と成りて或時唯唯喇嘛らまのおに諸長  
 と成りて火草と成り墨史兼の女人もお成りし中葉に  
 諸亂ありて成りし人々の武勇と成りて中葉に墨史兼  
 らん元來勇氣人不揚と成りて暴慢を成りて己が勇力  
 に誇りて度中の人々の更なり天が下に人々を成りて成り

罵りも慢しければ火草をい沈勇は性質を失ふ  
て而も博學なるまは是と雖も席ををりたるの  
中やそのまはとも熱在今と考ふるよ世も  
皆文武のあまきと勇とのい匹夫とい匹夫の  
勇い一人又款するのい何ぞ貴するよ是んと  
信りまはるる見業は是と考てん中た不  
学才なるまは我海をるる結を以てに  
中曉りるる習くみて火草をい小向の  
回更ふ泥を画ともしく武勇闘戦と海に  
ころく共々にあはく誠をいと始り人  
女四十三

細くは火草と我と長槍をい之向の  
丈夫は火草より火草は共にも  
かうも我言を怒り誠合とを  
吾蓋なり是別ら匹夫の勇  
果見蘭は狂も懐り有世の  
掛らんよる時座中に吾人  
よてある事海を殺なり  
て空ひまは果見業は澄方  
ま席上より遠ふ是と元  
終るは若殿のいぬのい  
女四十三



人とのつげは名をいふと憚らざりてまづ海を渡るを  
 知らず是ゆへに海を渡るにあつても船の争海と遠く武辺  
 と誓ひより起るるうちまは双方皆古捨といふ食養と  
 減ると務負終て後不意角の裁許とて一とありれば双  
 方齊しく用をこして度庭の東西不和ゆきば喧嘩喇嘛ど  
 ま度とあり諸士極例又居並び見おを既してお  
 のを鞍と打つたが双方より柄の毛と二支の毛を捨と  
 て互向ひしは墨見業めを始め又破めらるるま怒  
 争狗ふゆせんが今ぞ一捨又火草と突例一人の眼  
 と争ひ破辱と雪ぐんと突出を火草とんハ沈勇丈丈の

老練なるまは共しも信を以て互向ひまは秘術をそして  
 残るるり双方若らぬ別の者なるまは捨敗いつり墨と  
 と斤儀と香とく見おを火草とんハ捨や捨りえんやつと  
 智うけく墨見業めんと突依り墨見業めんの面目  
 と失ひ信くんと怒ると墨と論言なく程のこく武乳  
 して互別ま友人とも元の席不ぬまは度才に互合人  
 火草とんが文業のまをくぞ不業力量と責嘆しつりる  
 喧嘩喇嘛らまは火草とんを責しぬは墨見業めんと  
 智めありまをく墨見業めんのまを眼と食まんことと  
 双方ハ内重と下さま捨負の時の都合なり捨りま捨る

こころよく負さりて死ぢ懐るるまじくまひよき恨と扱を  
程水臭の交りをは後く太勅と勅びとと上云あまの  
人らつと差つて以と取載し時後まはるるく正  
より要更茶も我者よりいふも念中  
ぐく火草と付候あつたつと火草と平  
たと虽ども女も由りあるれば本を建するおも  
しに今度囁囁王も若と奉て唯唯刺麻らま  
つも色又と一味合体と形を来りしう刺麻ら門流の  
お下友と取ると跡くぞ召集めぬ火草と要更茶も  
もま席小連りるるけ時唯唯刺麻らま席上小ありて諸君

向の今を清政と執り困りの下民飢餓と免がまざるの苦患  
と忍る不忍びど依る囁囁王も若と奉て清  
と氏と故とんと衆ととの激文と一味合体と形を来り  
まり囁囁王も又加勢して可あらん又是と付て  
左清小忠とそして可あらん中とあまれば馬斯坦とを  
て中々るい囁囁王もより中緘るるを清虐政  
目くは増長とまは天何ぞ是と免さん既不滅亡の時  
しるはし後くは囁囁王もと並び立てて氏とす  
あつた天又明のまらんとお連是は唯唯刺麻らま  
始の尻茶も一変して一味同定の厄縁と差けるけ日の大

倅定めて返出候不入多きは付墨児茶らん不若不義の心  
 と生ト今宵の虚不季一火草と付く日比の背懐と  
 茲せんと諸人よりかゝせよと返出候一鼓に敵海の傷なる  
 船敷の落又成と潜め候の跡の跡をみぬ身の大草とんい  
 僕不脱落とせつつけ所と母り候るよ思ひかけらるる様  
 より墨児茶らん日比の返出候の初まると思くも孫乃  
 其槍とびく彼後より脊骨と掛て突きてり火草らん元来  
 健者らまの突きたらう者おとくヤア未練を槍の墨児茶  
 らん已は匹士の勇と誇り我不脱れめらるとま返出候の  
 欺し付とは奇怪らまよりや淫疾の負れどもを怒く

四百十六

抑のまふ討まん中と突まし槍とを深ある墨児茶らんい  
 力の限り槍と振り押倒さんと挑めども元来武術力弱  
 まし火草らんが死懐の種成ふ由り逢くや思ひまん槍と  
 捨て十く滅も利ど槍と勝まし何處ともなく迎候らり

韃靼勝敗記卷之四終



